高山寺蔵『金剛頂瑜伽経』（浄院寺一切経）について

赤尾栄慶

はじめに

平安時代初頭、わが国の仏教界では最澄・空海の活躍が目覚しいが、写経史の上では平安時代前期の遺品[1]は少なく、不振の時代として位置づけられている。純密が請来され、天台・真言両宗が加持祈禱の実践を主としたので、写経という作善そのものがふるわなくなったのと経典自体の需要が減少したとの見方もできる[2]。このような状況の中で、関東諸国では承和年間、仁寿年間を中心にたびたび一切経の書写が命じられている。承和元年（八三四）五月、上野国緑野（みとの）郡緑野寺にある一切経を底本として相模・上総・下総・常陸・上野・下野などの国司に一切経を書写せしめるようにとの勅が出されている（『続日本後紀』巻三）[3]。翌年正月には、それに加えて『貞元釈教録』[4]や『梵釈寺目録』[5]所収の律論疏章・紀伝集抄なども書写するようにと勅が出されている（同巻四）[6]。更に承和六年（八三九）には今名のあがった関東六カ国に武蔵を加えた七カ国に一切経の書写が命じられ（同巻八）[7]、仁寿三年（八五三）にも陸奥を含む関東六カ国に一切経の書写が命じられているのである（『文徳実録』巻五）[8]。これら関東諸国における一切経書写の記録が写経不振といわれる平安時代前期には非常に注目されている。また単独の経典ではあるが、関東における写経の遺品としてよく知られているものに、貞観十三年（八七一）、上野国前権大目安倍小水麻呂が発願した『大般若経』（通称、小水麻呂願経）がある。

さて今から取り上げようとする弘仁六年（八一五）の奥書と願文を有する高山寺蔵、重要文化財『金剛頂瑜伽経』三巻（浄院寺一切経）は、その書写年代も平安時代ごく初期で、先の『続日本後紀』巻三に見える上野国緑野（みとの）郡緑野寺、すなわち浄院寺一切経の遺巻であることが知られており、六国史の記録との関連を示した具体的な遺品として夙に有名なものである。ただ、従来より浄院寺（緑野寺）の一切経の遺品であることは指摘されているが[9]、『金剛頂瑜伽経』そのものの書写の背景があまり論じられていないように思う。そこで本稿では、『金剛頂瑜伽経』（浄院寺一切経）の書写の背景を中心に奥書や願文などの諸問題をも視野に入れながら、遺品の少ない平安時代前期の代表的古写経について考えてみたいと思う。

一

まず現状を見ることにしよう。三巻とも巻子本で料紙は楮紙、現在の紙色はうすい褐色をしている。表紙・朱漆塗棗形軸・巻紐はそれぞれ後補と見られ、各巻の見返しに天保元年（一八三〇）の修理銘がある。本文は三巻とも一筆とみられ、奥書より教興なる人の書写になることが知られる。平安時代前期の筆致で一字ずつ謹厳に書写されているが、のびやかさに欠けるやや硬直した筆致である。弘仁六年の奥書と願文の他に朱書、白書による加点が加えられており、肉眼で観察した結果を記せば次のようである（図版参照）。

〔1〕巻第一

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王経上巻

（首題）金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経第一

（尾題）金剛頂瑜伽経巻第一

紙本墨書　縦二六・五cm　全長八五七・七cm　紙数一六　紙長

（第二紙）五五・九cm　界高二〇・五cm　界巾（平均）一・八cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔2〕巻第二

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王経中巻

（首題）金剛頂一（切）如来真実摂大乗現証大教王経第二

（尾題）金剛頂瑜伽経巻第二

紙本墨書　縦二六・五cm　全長七五九・五cm　紙数一四　紙長

（第二紙）五六・八cm　界高二〇・五cm　界巾（平均）一・八cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔3〕巻第三

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王経下巻

（首題）金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経第三

（尾題）金剛頂瑜伽経巻第三

紙本墨書　縦二六・五cm　全長七六六・二cm　紙数一四　紙長

（第二紙）五七・三cm　界高二〇・五cm　界巾（平均）一・八cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔奥書〕（各巻とも）

上野国　縁（緑）野郡　浄院寺

一切経本

掌経仏子教興

掌経仏子

写経主仏子教興

経師近事法慧

弘仁六年歳次乙未六月十八日即是平城宮御宇神野天皇之世也

奉為　皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基無動六親七世裕徳有余近霑自身遠洽他界

一切行者法眼

無上菩提正因

（巻第二は「遠洽他界」が「遠浴他界」になっている。）

〔加点奥書〕

●巻第一〈墨書奥書の後〉

（白書）「(1)三月廿四日於仁和寺南御室点始同五日点了

（朱書）　(2)□　「沙門叡算之」

●巻第二〈墨書奥書の後〉

（白書）「(3)□」

（朱書）「寛弘五年三月廿六日於仁和寺之内南御室受学高尾法照闍梨畢　沙門叡算之」

●巻第三〈墨書奥書の前〉

（朱書）「長元八年十一月十六日於田野御房点了　伝授師僧都御房也」

〈墨書奥書の後〉

（白書）「(4)□　求法僧叡算」

（朱書）「寛弘五年三月廿七日於仁和寺之内南御室高尾法照闍梨受学了　沙門叡算之」

〔見返し墨書・修理銘〕

●巻第一

「秘密経王三十六巻弘仁六年五月依海阿闍梨之勧進上毛沙門教興書進右十無尽院蔵中梠辛櫃之銘三十六巻之内金剛頂経三巻現存云々天保元年七月奉修補之　高山沙門慧友護謹記」

●巻第二

「金剛頂経第二（中略、奥書・願文同文ヲ写ス）天保元年七月奉修補之　高山沙門慧友護謹記」

●巻第三

「金剛頂瑜伽経第三長元八年十一月十六日於田野御房点了（朱書）　伝授師僧都御房也寛弘五年三月廿七日於仁和寺南御室点始（之内）高尾法照闍梨奉受之　沙門叡算之天保元年七月奉修補之　高山沙門慧友護謹記」

尚、現在判読がむずかしい加点奥書の部分は、『高山寺経蔵典籍文書目録第一』[10]（高山寺資料叢書第三冊）には次のように報告されている。

(1)「□寛弘五年」

(2)「□□□（法？）（阿？）闍梨奉（？）受了　叡算之」

(3)「寛弘□（五カ）年三月廿□（七カ）日点了　求法僧叡算」

(4)「寛弘□　□」

これら三巻は、上野国緑野郡浄院寺で書写され、同寺の一切経として納められた経巻の遺品で、弘仁六年六月十八日の年紀と共に仏子教興が書写したことがわかる。また願文には今上天皇（神野天皇＝嵯峨天皇）はじめ皇妃・皇太子・諸皇・左右大臣の洪基の安寧と六親七世の眷属の裕福と功徳を祈り、合わせて一切行者の無上菩提の正因となるよう祈願する旨が記されている。

浄院寺は、現在の群馬県多野郡鬼石町にある浄法寺のことである。鑑真の弟子道忠[11]が創建したと伝えられており、緑野寺・緑野教寺とも呼ばれる。また浄法寺は広厳山般若浄土院と号し、最澄が著わした『法華長講会式』に

東土上野国　般若浄土院
道忠大禅師　信心弟子等
教興及道応　助写一切経[12]

と記されていることでも知られている。ここにある道忠大禅師の弟

子教興というのが「写経主仏子教興」その人である。また「助写一切経」とある一切経は、『叡山大師伝』の延暦十六年（七九七）の条[13]に最澄が一切経の書写を発願した際に道忠禅師などが助写したという記事のものに相当すると見られる。浄院寺一切経は、先にも触れた如く、関東での一切経書写の底本となったように、当時の関東諸国としては貴重であり、なおかつ整っていた一切経であったであろうことが窺い知られる。ただ、浄院寺一切経の書写事業が弘仁六年に行なわれたかどうかは速断できない。

その他、奥書や願文の中で興味深いのは、まず嵯峨天皇が「平城宮御宇神野天皇」と呼ばれていることである。「平城宮御宇」は「神野天皇」にかかる言葉であり、神野とは嵯峨天皇の諱をいう。恐らく嵯峨天皇の諱を書き記した最古の写本であろう。「平城宮御宇」という表現は理解しにくく、大同五年（八一〇）に平城上皇が平城宮に移御し、薬子の変以後も平城宮に留まったという歴史的出来事があったが、それと何か関連があるのであろうか。「皇帝皇妃」以下の願文では、左右大臣とあるも、当時は右大臣藤原園人のみで左大臣はおかれていなかった。多分、儀礼的な定型の表現をとったものであり、なおかつ四字一句とするための方策であろう。ただ「皇妃」とあるのはある意味では正確な表現であり、檀林皇后こと橘嘉智子が皇后となったのが弘仁六年の七月十三日であるからである。

各巻に加えられている訓点については、『高山寺典籍文書の研究』[14]（高山寺資料叢書別巻）に詳しいが、寛弘五年（一〇〇八）三月に僧叡算が仁和寺南御室に於て加点したもので、白点は園城寺系統の西墓点、朱点は仁和寺系統の円堂点が用いられている。[15] また朱点は高尾法照阿闍梨より受学したものである。巻第三には長元八年（一〇三五）十一月十六日に田野御房に於て点し了ったとの識語があり、この朱点は円堂点（異流）とされる。これらは国語資料としても重要であろう。

伝来に関しては、いつ頃まで浄院寺にあったかは定かではないが、叡算によって加点された寛弘五年（一〇〇八）三月には京都にあったことは確実である。巻第一見返しの慧友の墨書によれば十無尽院にあったと思われるが、その後高山寺の真言関係の聖教を納めた経蔵に納められたことになる。表紙に「真第三箱」とあるのがそれで、『高山寺経蔵聖教内真言書目録』所収の典籍であることがわかる。[16] この目録は建長三年（一二五一）に十眼房長真によって記されたもので、鎌倉時代中期以降真言書の箱番号が改番されて「真」の字が冠せられており、現在もその大部分が高山寺の経蔵に納められている。

修理銘を記した慧友は、高山寺の聖教の整理や修理に力を注いだ学僧で、字は僧護という。伊賀上野に生れ、智積院第二十八世謙順についたが、後に一派を離れて高山寺に隠栖した。嘉永六年（一八五三）七月十日、七十九歳で没した。

二

『金剛頂瑜伽経』は、唐の不空三蔵（七〇五―七四）の翻訳になる密教経典で、『金剛頂経』、『金剛頂大教王経』、『三巻大教王経』などと略称されており、詳しくは首題にもあるように『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』という。大日経と並んで「両部の大経」と呼ばれている密教経典の中でも最も重要な経典の一である。全体十万頌十八会からなる経典といわれているが、実際は初会のみが存在すると考えられている。不空訳の本経は、この十八会のうち、初会

の第一品のみを翻訳したものである。内容は毘盧遮那如来が一切義成就菩薩の問いに答える形で説きはじめられ、仏身を成就する実践としての五相成身の観門、金剛界三十七尊の三昧耶と真言、金剛界大曼荼羅建立の儀則、四曼荼羅などが説かれている。異訳としては、金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』四巻、施護訳『一切如来真実摂大乗現証三昧大教王経』三十巻が知られている。

不空による翻訳年代は、『貞元釈教録』巻第十五[17]の記録によれば唐の天宝十二年（七五三）河西節度使哥舒翰の請により河西武威に於て翻訳していることがわかる。わが国には大日経は既に奈良時代に請来されていたが、金剛界所依の本経は、大同元年（八〇六）に空海によって請来されたのがそのはじめであり[18]、空海の『御請来目録』の新訳等経一四二部二四七巻の劈頭を飾るのもこの経典である。当然のことながら、空海請来の聖教類の中でも非常に重要な経典であったに違いない。かの最澄が『金剛頂瑜伽経』にはじめて触れたのは弘仁三年（八一二）十一月のことであろう[19]。すなわち、最澄は同年十一月十五日に高雄山寺で行われた金剛界灌頂を受けるためであろうか、その直前の十月二十六日付の空海に宛てた消息[20]で「金剛頂真実大教王経一部三巻」とこの経典の借請を行っている。わが国に請来されて六年後であった。それ故、この経典は未だ巷間にあまり流布していなかったと推測される。

このような状況のなかで、弘仁六年（八一五）に上野国浄院寺で書写されたのが本巻である。関東の地ということを考慮に入れれば、比較的早い時期に写経が行なわれたと思われる。何か写経を促す特別な事情があったのではなかろうか。その手がかりを与えてくれるのが巻第一の見返しにある慧友の墨書である。そこに

秘密経王三十六巻弘仁六年五月依
海阿闍梨之勧進上毛沙門教興書進
右十無尽院蔵中梱辛櫃之銘三十六巻之内
金剛頂経三巻現存云々。

とあるのは先に報告した通りであるが、これは天保元年（一八三〇）に行われた修理の際に高山寺慧友が書き留めたものである（図版参照）。十無尽院の梱辛櫃の銘を転写したものらしいが、ここに実に興味深い記事がある。『金剛頂経』などの密教経典三十六巻[21]を弘仁六年五月空海の勧進によって写経をしたという旨を教興が記しているという内容で、その際の『金剛頂経』三巻、すなわち本巻は現存しているというのである。これで想起されるのは、空海が弘仁六年三月から四月にかけて弟子の康守、安行らを使者として関東の有縁の人々に密教経典の書写を呼びかけていることである。すなわち、空海は同年四月二日付の「諸の有縁の衆を勧めて秘密蔵の法を写し奉る応き文」（『性霊集』巻第九）[22]いわゆる「勧縁疏」の冒頭に

諸の有縁の衆を勧め奉って秘密の法蔵合はせて三十五巻[23]を写し奉る応し。

と述べている。ここで「有縁の衆」とされたのは下野の広智[24]、陸州の徳一[25]、甲州藤太守（真川）[26]、常州藤使君（福当麻呂）[27]らである。また四月五日付で陸州の徳一に宛てた空海の消息[28]には

空海、大唐に入って学習するところの秘蔵の法門は其の本、未だ多からずして、広く流伝すること能はず。衆縁の力に乗じて書写し、弘揚せむと思欲ふ。

とあることからも、帰朝後九年の後も空海請来の密教経典類があまり流布していなかった様子が窺える。それ故、慧友によって転写さ

れた記事の信憑性は非常に高い。このことは、本巻の本文を三十帖冊子本や大正大蔵経本と比較校合した時、三十帖冊子本と非常に類似点が多いことからも確認される。[29] 特に本巻で注目されるのは、巻第一（第十一紙目）に後の写本などにはある一行が当初欠落している点である。すなわち

奇哉我大笑　諸勝大奇特
安立仏利益　常住妙等引[30]

の偈頌に続く

時彼常喜悦根大菩薩身、従世尊心下、依一切如来後月輪而住。
復請教令、時世尊入一切如来奇特加持名金剛三摩地。[31]
（傍線筆者）

とある部分である。「後月」以下十七字が本巻にはない一文であり、後の本文校合の際にこの一文が行間に朱で挿入されている。加えて、三十帖冊子本も後に朱書でこの一文を補っている[32]（図版参照）。これは、当初三十帖冊子本にもこの一文がなかったことを意味している。三十帖冊子本の朱書の挿入がいつ頃行なわれたかは検討を要するが、わが国に齎されたごく初期の金剛頂経の写本にはこの一文が当初欠落していたであろうことが推察される。[33] これらにより浄院寺一切経中の経巻であった本巻は、三十帖冊子もしくは空海請来の経典に非常に近い写経をテキストとして書写されたことは間違いなかろう。そしてその時期は奥書にあるように弘仁六年（八一五）六月、すなわち同年三月から四月にかけて行なわれた空海の関東に於ける写経勧進を承けて書写されたものとみられる。[34] 恐らくわが国で書写された『金剛頂瑜伽経』の現存最古の遺品と考えられる。

また本巻の本文に関して付け加えれば、梵語ヴァジュラ vajra（金剛と訳す）の音写語である「嚩日囉」が「嚩日囉」とあるべき三文字をほとんど「嚩囉」と二文字のように書写しており、当時この用語が書写した教興に正しく理解されていたかは疑しい。或いは密教経典の内容が未だ正しく関東は言うに及ばず、わが国の仏教界に浸透していなかった表れかも知れない。

三

本巻の書写の背景などを尋ねたが、これらにより浄院寺（緑野寺）や道忠の弟子教興について従来あまり指摘されていないことが浮び上がってきた。従来よく知られているのは最澄との関係に於てであった。『叡山大師伝』[35] によれば、最澄が弘仁六年（八一五）秋、実際には弘仁八年春に行なったとみられる関東行化の旅[36] に於て、上野国浄土院（緑野寺）と下野国大慈院に各々一級の宝塔を起し、塔別に一千部八千巻の法華経を安置したとある。そしてその塔下に於て法華経を毎日、合わせて金光明経や仁王経などの大乗経をも長講したが、その様子は「所化の輩百千万を逾え、見聞せる道俗歓喜せざるということ無し」[37] であったといい、『元亨釈書』巻第一にも「東州経塔会、上野緑野寺、場に預りし者九万人、下野大慈寺は五万人、東民化に嚮うこと斯の如し」[38] と伝えている。これは延暦十六年（七九七）最澄が比叡山で一切経書写を発願した時、これを助けて「大小経律論二千余巻」[39] を写して以来、師資の関係を欠かさなかった道忠禅師の弟子である「上野国浄土院一乗仏子教興・道応・真静、下野国大慈院一乗仏子広智・基徳・鸞鏡・徳念」[40] らの力添えがあったからであるという。これらより、最澄と緑野寺の道忠や教興などが緊密な関係

にあったことが知られる。もちろんこれらは否定しようもないが、今の『金剛頂瑜伽経』は関東を中心とした空海の写経勧進という教化活動の成果であろうことが明らかとなり、むしろ最澄より空海との連がりが浮び上がってくる。今、最澄との関係で名の挙がった広智なども空海より（弘仁六年）三月二十六日付の写経依頼の書状[41]を受け取ったと思われ、必ずしも最澄とだけの師資関係ではなかったように思われる。当時、関東の仏教界では、空海の真言・最澄の天台両教団に対して特に偏らない受容態度を取っていたのかも知れない。それだからこそ、関東を中心とした空海と最澄の教化活動、すなわち教線拡大の努力がなされたと見たい。加えて『叡山大師伝』で実際には弘仁八年（八一七）に行なわれたとされる最澄の関東行化を弘仁六年としているのは、空海のこのような教化活動に対する何らかの配慮がそこに働いたからとみるのはやや飛躍した発想であろうか。

むすびに

いわゆる純密は最澄・空海の入唐により請来されたが、その経典儀軌類は秘密の経典なるが故にその流布も一般的でなかったと思われる。経典を書写する、すなわち写経をするためには当然のことながら底本となるべきテキストが必要であり、テキストになるべき経典が無ければ写経という行為は成立しないに違いない。今の『金剛頂瑜伽経』（浄院寺一切経）もテキストとなるべき経典の請来の経緯や空海の書状などから、当時、広く流布していなかった経典であったと思われる。それが関東の地で弘仁六年に書写されたということに注目したが、その直接の機縁は同年三月から四月にかけての空海による関東を中心とした密教経典書写の働きかけであろうことが明らかになったといえよう。まさに空海が下野の広智に宛てた書状に

貧道、大唐に遊むで習ひ得るところの真言秘蔵、其の本、未だ多からざるに縁って、久しく講伝に滞る。今思はく、衆機の縁力に乗じて神通の宝蔵を書写せむことを。[42]

というような願いに答えることになったものであろう。そして本写経は『金剛頂瑜伽経』としては三十帖冊子につぐ遺品で、恐らくわが国で書写された現存最古の遺品と見られる。

高山寺蔵『金剛頂瑜伽経』（浄院寺一切経）は数少ない平安時代初期の紀年を有するものとして、更には『続日本後紀』という正史の記録との関連を示した具体的な遺品としてよく知られた古写経であったが、これらによりその書写の背景などに種々興味深い点があることが明らかとなったといえよう。

〈注〉

1 本写経以外の代表的遺品には、知恩院蔵『菩薩地持論』十帖（重文、延暦十六年藤原継縄供養経）、根津美術館蔵『順正理論』巻第六（重文、大同元年）、安藤積産合資会社蔵『大般若経』巻第九十五（重文、池上内親王御願経）、慈光寺蔵『大般若経』百五十二巻（重文、貞観十三年安倍小水麿願経）などがある。

2 田中塊堂著『日本写経綜鑒』には「奈良六宗に代って興った天台、真言の平安仏教は加持祈禱の実践を主としたもので、経典の需要も著しく減少した。」（一五頁）とある。

3 『新訂増補国史大系』第三巻所収、仁明天皇承和元年五月の条（二六頁）。

4 唐の円照が貞元十六年（八〇〇）に撰した経録。詳しくは『貞元新定釈教目録』といい、三十巻より成る。大正大蔵経第五十五巻所収。

5 梵釈寺は延暦五年（七八六）桓武天皇の創建といわれ、現在の大津市滋賀里にあったとされる寺院に相当するとみられ、梵釈寺目録はその

寺院にあった経典目録を指すと思われる。

6 『新訂増補国史大系』第三巻所収、仁明天皇承和二年正月の条（三六頁）。

7 同右、仁明天皇承和六年三月の条（八六頁）。

8 『新訂増補国史大系』第三巻所収、仁寿三年五月の条（五一頁）。

9 代表的なものに田中塊堂著『日本写経綜鑒』がある。

10 同書一二～三頁。

11 道忠については『叡山大師伝』（『伝教大師全集』巻五所収）に「有二東国化主道忠禅師者一、是此大唐鑒真和上持戒第一弟子也」（附録七頁）とある。

12 『伝教大師全集』巻四、二六六頁。

13 『伝教大師全集』巻五、附録七頁。

14 同書、築島裕「高山寺経蔵の平安時代の典籍について」（四四～五頁）参照。

15 築島裕著『平安時代訓点本論考ヲコト点図仮名字体表』（昭和六一年、汲古書院）一九九頁、七一二～三頁所載を参照。

16 宮澤俊雅「高山寺経蔵聖教内真言書目録」（高山寺資料叢書第十四冊所収）に詳しい。

17 大正大蔵経第五十五巻八八一頁中。

18 木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』（平成元年、国書刊行会）には『金剛頂経』（不空訳）として『大日本古文書』正倉院文書より八件を所出しているが、それらは経典の翻訳年代（天宝十二年、七五三）や正倉院文書の記述により⑱一四五（金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』四巻に相当）を除いてすべて金剛智訳『金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』一巻に該当するとみられる。古経堂の名で知られる養鸕徹定の収集品（知恩院所蔵）の中に「天平勝宝三年十一月十、十一日両日間於大智寺　奉　尊与写竟」という奥書を有する『金剛頂瑜伽経』巻第一がある。これは大正大蔵経編纂の際にも校訂本として使用されたが、翻訳年代や書風より天平勝宝三年（七五一）の書写とは認め難い。恐らく、平安時代前期から中期の書写かと見られる。ただ、この写経にも本稿四〇頁上段に指摘した「後月輪而住、復請教令、時世尊入一切如来」の一文がなく、後に朱で挿入されているのは注目される。

19 例えば、木内堯央著『天台密教の形成―日本天台思想史研究―』（平成二年、北辰堂）には「つぎにみえるのは、弘仁三年（八一二）十月二十六日付の、『金剛頂真実大教王経一部三巻』の借請である（伝全五―四五四頁）。これによって、最澄ははじめて、不空訳の『金剛頂大教王経』三巻に触れたことになる。」（一五頁）とある。

20 『伝教大師全集』巻五（四五四～五頁）所収。

「弟子最澄和南

奉請本経事

金剛頂真実大教王経一部三巻

右為二本経奉請一如レ件、来年四月以前奉レ写畢即奉上、不二敢損失一。

謹和南。

弘仁三年十月廿六日　　弟子最澄状上

乙訓真言院側　」

21 空海の「勧縁疏」には三十五巻とあり、その内訳は『弘法大師空海全集』第六巻（筑摩書房、昭和五十九年）によれば「『大日経』七巻、『教王経』三巻、『略出経』四巻、『大日経疏』二十巻、『菩提心論』一巻。また一説には『略出経』を除き、『蘇悉地経』三巻、『聖位経』一巻を加えるとする。」（六三一頁）とある。今の三十六巻というのは誤写なのか、経典の組み合わせが違うのか断定できない。

22 『弘法大師空海全集』第六巻（筑摩書房、昭和五十九年）六〇七～一二頁所収。

23 注21を参照。

24 平安時代初期の天台宗の僧。鑑真の弟子道忠に師事し、下野国大慈寺に住す。一般には最澄の関東行化の際、援助をしたことで知られている。

25 徳溢・得一ともいい、奈良時代後期から平安時代初期に活躍した法相宗の僧。はじめ興福寺修円に法相を学び東大寺に住したが、後に東国に移り、常陸国筑波山中禅寺、会津の恵日寺を開いた。『慧日羽足』・『中辺義鏡』などを著わし、最澄と三一権実の論争を展開したことは有名。

26 『日本後紀』巻二十二、弘仁三年正月の条（『新訂増補国史大系』第三巻所収）によれば「従五位下藤原朝臣真川為二甲斐守一」（一一〇頁）と

ある。

27 『日本後紀』巻二十四、弘仁五年七月の条（同前）に「従五位下藤原朝臣福当麻呂為二常陸守一」（一二五頁）とある。

28 『高野雑筆集』巻上（『弘法大師空海全集』第七巻、十三頁）所収。

29 附編の本文校合表参照。

30 大正大蔵経第十八巻二一〇頁下。

31 同前。

32 附編の本文校合表参照。

33 注18を参照。

34 管見の及ぶ限り、この点について述べてあるのは『群馬県の地名』（日本歴史地名大系第十巻、平凡社、昭和六二年）の浄法寺の項目（三一一頁）のみのようである。

35 『伝教大師全集』巻五、附録三〇～二頁。

36 『最澄』（原典日本仏教の思想2、岩波書店、平成三年）解説編、「最澄とその思想」（薗田香融著）の中、「三一権実論争について」に詳しい。

37 『叡山大師伝』（『伝教大師全集』巻五、附録三一頁）所出。

38 大日本仏教全書一〇一冊、一五〇頁上。

39 『叡山大師伝』（『伝教大師全集』巻五、附録七頁）所出。

40 同右、三一頁所出。

41 『高野雑筆集』巻上（『弘法大師空海全集』第七巻、十六頁）所収。

42 同右。

附編　本文校合表

・本表は大正大蔵経所収本（第十八巻）・国宝三十帖冊子所収本（第十一帖）・高山寺本（浄院寺一切経）の三本の不空訳『金剛頂大教王経』の本文を校合したものである。この際、三十帖冊子は法蔵館刊行（昭和五二年）の複製を用いた。

・巻第三のみは文字の異同が非常に多いので前後を省略し、該当する文字のみを掲げた。

〈巻第一〉

頁数	大正大蔵経（第十八巻）本	頁数	三十帖冊子所収本	紙数	弘仁六年書写高山寺本
207上	珠鬘瓔珞	b・1	珠鬘纓珞	1	同上
	猶如胡麻		由如胡麻	〃	〃
中	空蔵大妙光		空蔵妙大光	2	〃
	諸設縛祖父	2・c	諸護嚩祖父		諸設嚩祖父
	正流転大覚		正流転大大		同上
	遍照最勝王		遍照最勝主		〃
下	唵質多鉢囉二合底丁以反		唵質多鉢囉底丁以微反		唵質多鉢囉底丁以微反
	微騰迦嚕弭		騰迦嚕弭		勝迦嚕弭
	猶如遍修		由如遍修		同上
	唵菩提質多畝怛波娜		唵菩提質多畝怛波		〃
	夜弭		二合娜夜弭		
	金剛堅固善住		則堅固善住		堅固善住
208上	唵嚩日羅二合怛麼二合句		唵嚩日羅二合怛麼		唵嚩囉二合怛麼二合句
	哈		二合俱引哈		引哈

	唵也他薩婆怛他誐多		唵也他薩嚩怛他羯多		同上
	薩怛二合他哈		薩怛二合他哈	4	〃
中	大摩尼宝	d・3	大磨尼宝		〃
	不久現説等覚		不久現証等覚		嚩囉薩怛嚩二合下同
	嚩日羅二合薩怛嚩二合下同		嚩日羅薩怛嚩二合下同	5	曜一切世界
	照曜一切世界		同上		同上
	摧諸魔軍		摧諸魔		〃
下	無上大乗現証	4・a	無上大乗見証		〃
	灌頂已授与		灌已受与		〃
	授与我手掌		受与我手掌	6	〃
	嚩日羅二合邏引惹		嚩日羅邏引惹		嚩囉邏引惹
	従金剛大鉤形		同上		従金剛大大鉤形
209上	奇哉不空王		奇我不空王		同上
	嚩日羅二合邏哦		嚩日羅邏哦	7	嚩囉邏哦
中	奇哉自性浄		奇我自性浄		奇哉自性浄
	随一切安楽		随染一切安楽		同上
	如来摩羅業		同上		如来応羅業
	金剛弓灌頂時		金剛灌頂時		同上
	嚩日羅二合娑度		嚩日羅娑度		嚩囉娑度
下	已受一切如来等喜	6・c	已受一切如来極喜智	8	同上
	無等喜一切安楽悦意		金剛三昧耶尽無余有		同上
	故乃至得一切如来無		情界受一切等喜		
	上喜味		無上喜味		

210上	嚩日羅二合羅怛那二合	嚩日羅羅怛那	9	嚩囉羅怛那	
	奇哉妙灌頂	奇我妙灌頂		同上	
	金剛宝形灌頂	金剛宝芽灌頂		〃	
	授与我手掌	受与我手掌		〃	
	嚩日羅二合帝惹	嚩日羅帝惹		嚩囉帝惹	
	生大金剛日形	同上		生大金剛日於	
中	奇哉無比光	奇我無比光		同上	
	能浄清浄者	能静清浄者		〃	
	嚩日羅二合計都	嚩日羅計都	10	嚩囉計都	
	奇哉無比幢	奇我無比幢		同上	
下	嚩日羅二合賀娑	嚩日羅賀娑	11	嚩囉賀娑	
	依一切如来後月輪而	依一切如来奇特加持		同上	
	住復請教令時世尊入	（朱書で同文を挿入。）			
211上	一切如来奇特加持	金剛微笑笑悦	12	同上	
	金剛微笑悦	嚩日羅達摩		嚩囉達摩	
	嚩日羅二合達摩	生大蓮花形		同上	
	生大蓮華形	彼金剛蓮花形		〃	
	彼金剛蓮華形	作一切仏神通		〃	
	作一切神通	嚩日羅底乞灑拏三合	13	嚩囉底乞灑拏三合	
中	嚩日羅二合底乞灑拏三合				
b・9					
下	嚩日羅二合係都	嚩日羅係都		嚩囉係都	
	即彼婆伽梵	同上		即彼伽梵	
	大漫荼羅出已	大曼荼羅出已		同上	
10・c	菩薩摩訶薩身住世尊	菩薩摩訶薩住世尊	14	〃	

212上	奇哉金剛輪	奇成金剛輪	15	〃	
	漫荼羅三昧耶	曼荼羅三昧耶		〃	
	不退転法輪	不退転輪		〃	
	従自心出	同上		自心出	
	嚩日羅二合婆沙	嚩日羅婆沙		嚩囉婆沙	
	一切如来秘密語名金	一切如来三昧耶		同上	
	剛三摩地一切如来語				
	智三昧耶				
	大転輪智	大輪転智		同上	
	輪転戯論智	輪戯論智		〃	

〈巻第二〉

頁数	大正大蔵経（第十八巻）本	頁数	三十帖冊子所収本	紙数	弘仁六年書写高山寺本
212中	嚩日羅二合羯磨	d・1	嚩日羅羯磨	1	嚩囉羯磨
	即従婆伽梵持	10・c	即彼婆伽梵持		同上
	金剛薩埵三摩地		金剛薩三摩地		〃
下	奇哉仏不空		奇諸仏不空		〃
	如来灌頂授与		如来灌与		〃
	授与我掌中		授於我掌中	2	〃
	嚩日羅二合路乞沙		嚩日羅嚩乞沙		嚩囉嚩乞沙
	二合				
213上	金剛薩埵三摩地		金剛薩埵三磨地		同上
	嚩日羅二合薬乞灑	12・a	嚩日羅薬乞灑二合	3	嚩囉薬乞灑二合
	二合				
	摧一切魔		摧伏一切魔		同上

214上　中

奇哉大方便
調伏諸難調
方便愍慈者
嚩日羅二合散地
如来智已印一切如来
智故
薩怛嚩嚩日離
復聚為一体
奇哉一切仏
羅怛那嚩日離二合
一切如来心纔出已出
宝光明
奇哉一切仏
所生法金剛
達摩嚩日離二合
従彼蓮華光明
羯磨嚩日離二合
一切羯磨光明
我名業金剛
如来大婆羅蜜
嚩日羅二合邏西
奇哉無有比
嚩日羅二合摩犁
左辺月輪而住
嚩日羅二合霓
愚以帝
反

b•13　下

奇我大方便
同上
方便慈愍者
嚩日羅散地
如来智故
同上
〃
奇我一切仏
羅怛那嚩日離
一切如来心出宝光明
奇我一切仏
所生金剛
達摩嚩日離
従彼蓮花光明
羯磨嚩日離
一切羯摩光明
我多業金剛
如来大波羅蜜
嚩日羅邏西
奇無比我有
嚩日羅摩犁
左辺月住
嚩日羅霓愚以帝
反

4　5　6　7

〃
調伏誰難調
同上
嚩羅散地
同上
薩怛嚩嚩羅
復為聚一体
同上
羅怛那嚩羅
同上
〃　〃
達摩嚩羅
同上
羯磨嚩羅
同上
〃　〃
嚩羅羅西
同上
嚩羅摩犁
同上
嚩羅霓愚以帝
反

215上　中　下　216上

法印彼婆伽梵
由此供養故
如来舞供養
嚩日羅二合儞哩二合
帝曳
如来舞広大儀
如来舞供養儀
金剛舞大天女
由金剛舞儀
嚩日羅二合杜閉
如来身復聚
嚩日羅二合補渋閉
二合
嚩日羅二合路計
光明界荘厳具
世尊金剛摩尼
嚩日羅二合嶮題
奇哉香供養
嚩日羅二合矩賒
嚩日羅二合播賒
引入印衆
嚩日羅二合薩普二合
吒
縛印衆出已出
嚩日羅二合吠捨
嚩日羅二合三摩惹

d•15　16•a

法印則彼婆伽梵
由此供喜故
如来儞供養
嚩日羅儞哩二合帝曳
二合
如来儞広大儀
儞供養儀
金剛儞大天女
由金剛儞儀
嚩日羅杜閉
如来身雲復聚
嚩日羅補渋二合閉
嚩日羅路計
光明界厳具
世尊金尊金剛摩尼
嚩日羅嶮題
奇塗香供養
嚩日羅矩賒
嚩日羅播賒
引入印主
嚩日羅薩普二合吒
縛印衆出已
嚩日羅吠捨
嚩日羅三摩惹

8　9　10　11

同上
〃
嚩羅儞哩二合帝曳
二合
同上
〃
嚩羅杜閉
同上
嚩羅補渋二合閉
嚩羅路計
同上
世尊金剛摩尼
嚩羅嶮題
同上
〃
嚩羅播賒
同上
嚩羅薩普二合吒
同上
嚩羅吠捨
嚩羅三摩惹

〈巻第三〉

頁数	漫 大正大蔵経(第十八巻)本	頁数	曼 三十帖冊子所収本	紙数	同上 弘仁六年書写高山寺本
217下 ℓ10	如来所|至已	b・17	如来至已	1	同上
	唵薩嚩二合|怛他		唵薩嚩怛他		〃
	時|十方一切世界		十方一切世界		〃
中	無始無|終		無始終	12	〃
	此|一百八讚		此百八讚		〃
	我礼金剛召|		我礼金剛口|		〃
	宝|蔵金剛峯		空|蔵金剛豊		〃
	真|剛威大炎		金|剛威大燄		〃
	金剛剣仗|器		金剛剣大器		〃
	妙吉金剛染|		妙吉金剛深|		〃
下	金剛拳|勝誓		金剛奉|勝誓		〃
	我等讃|汝尊		我等請|汝尊		〃
	一切如来請|語		一切如来讃|語		〃
217上	金剛眼浄業|	18・c	金剛眼浄等|	13	〃
	[illegible]|嚧請勅如本教		嚧 請勅如本		〃
			教		
	作|已称自名		同上		於|已称自名
	応請|一切仏		〃		応諸|一切仏
中	慈友而安住|		慈友而安立|		同上
	安住|三昧耶		安立|三昧耶		〃
	則不|等一切		則仏|等一切		〃

頁数	漫 大正大蔵経本	曼 三十帖冊子所収本	紙数	弘仁六年書写高山寺本
ℓ19	蘖	孽		〃
	昬	[illegible]		〃
	三	二		〃
ℓ20	嘌二合	哩		〃
ℓ21	蘖	孽		〃
	日羅	同上		囉
ℓ22	嚩	嚩二合		同上
ℓ24	蘖	孽	2	〃
ℓ25	哩二合	哩		〃
	蘖	孽		〃
ℓ26	日羅	同上		囉
ℓ29	蘖	孽		同上
	羅	囉		〃
218上 ℓ1	麽	麽二合		〃
	夜	夜二合		〃
ℓ2	蘖	孽		薩
	日囉	日囉二合		囉二合
	囉鞞嘌多二合	囉二合多		同上
ℓ5	蘖	孽		〃
	尼	同上		ナシ
ℓ6	麽	麽二合		麽
	哩夜	哩夜二合		同上
	蘖	孽		〃
ℓ7	日囉	日囉二合		囉二合
	嚕	路		同上
ℓ9	二合	三合		〃
ℓ12	婆	嚩		〃

218中 ℓ 3 ℓ 27 ℓ 25 ℓ 24 ℓ 23 ℓ 22 ℓ 20 ℓ 18 ℓ 17 ℓ 16 ℓ 15 ℓ 13

日囉二合 婆跢 爾也 叉二合 薩 悉 爾也 囉 日 誓水 黎 提 也二合 荼 嚩耶涅哩 惹 囉 避 吉溪反 惹 蘖 鏤薩婆 若 日囉 吒二合 他蘖

20・a

日囉 ナシ 你也 叉 薩多二合 你也 薩 囉 日 同上 梨 帝 ナシ 拏 嚩二合耶涅哩二合 ナシ 跛 吉遥反 你也二合 孽 鏤二合薩嚩 若 同上 吒 多孽

3

囉 〃 您 〃 同上 您 同上 囉 ナシ 誓 〃 〃 〃 〃 〃 〃 同上 您二合 〃 〃 〃 同上 惹 囉 〃 〃

219上 ℓ 3 ℓ 2 218下 ℓ 1 ℓ 29 ℓ 28 ℓ 27 ℓ 23 ℓ 19 ℓ 18 ℓ 17 ℓ 12 ℓ 8 ℓ 5 ℓ 4

日囉 藍 弩 囉二合 日 伽吒 烏 伽 芻 嚩 日囉 成就 埵 繫弟子 亭淫反上二合 嚩 姹 紇 二合 嚩 二合嚩日囉 現 現証 日囉 二合耽

21・b

日囉 藍 拏 囉 同上 伽二合吒 同上 伽二合 喝 縛 〃 同上 同上 繫彼弟子 夷淫反上 縛 吒 吃 ナシ 縛 嚩日囉 見 ナシ 日囉 三合躭 日囉

4

囉 同上 同上 囉 ナシ 伽二合吒 焉 〃 〃 同上 囉 ナシ ナシ 繫弟子 戒淫反上 同上 〃 〃 〃 〃 同上 嚩囉 〃 〃 囉 同上 囉

ℓ 5 ℓ 6 ℓ 7 ℓ 8 ℓ 9 ℓ 10 ℓ 11 ℓ 12 ℓ 13 ℓ 27 ℓ 29 ℓ 6 219中 ℓ 1 ℓ 8 ℓ 9 ℓ 10 ℓ 12 ℓ 20 ℓ 12

爾也	二合	日羅	嚩	二合	波	二合	二合	嚩日羅	二合	日羅	二合	左摩毘詵遮	日羅	係	嚩日羅二合麼麼	日羅	應	成	但	踊	睹	日羅	日	日羅	鈴	踊	日羅
你也	三合	日羅	縛	ナシ	波	ナシ	二合	嚩日羅	三合	日羅	同上	者摩遮	日羅	係	ナシ	日羅	同上	生	但	踊	惹	同上	〃	〃	哈	踴	日羅

5

奢	同上	羅	同上	〃	同上	摩	羅	〃	同上	羅	同上	羅	同上	〃	同上	彼	〃	同上	羅	同上	羅	鈴	羅	羅	ナシ	同上	羅

ℓ 21 ℓ 6 219下 ℓ 2 ℓ 8 ℓ 9 ℓ 11 ℓ 12 ℓ 7 220上 ℓ 2 ℓ 8 ℓ 9 ℓ 11 ℓ 13 ℓ 23 ℓ 6 220中 ℓ 4 ℓ 7 ℓ 8

羅	麼	於	日羅	曰	尼逸反	日羅	爾也	二合	南	爾也	墮	生	手	拍	日羅	笘	日羅	授	切	墮	生	応当	喜	日羅	恒嚩二合	日羅
同上	磨	同上	〃	ナシ	日羅二合	同上	尸逸反	你也	ナシ	嚩	你也	由	指	指	日羅二合	苦	日羅二合	受	印	墮	主	当応	同上	日羅二合	埵	日羅二合

22・c

6

7

ナシ	同上	ナシ	羅	同上	羅二合	尸逸反	奢	〃	同上	隨	奢	〃	〃	同上	羅二合	同上	羅二合	同上	〃	隨	同上	応当	寿	羅二合	同上	羅二合

ℓ18 ℓ16 ℓ13 ℓ12 ℓ10 ℓ7 ℓ5 221下ℓ4 ℓ24 ℓ22 221中ℓ17 ℓ21 221上ℓ12 ℓ28 ℓ27 ℓ23 220下ℓ21 ℓ18 ℓ16 ℓ15 ℓ13 ℓ9

蘇 弭 羅 輸 二合 語 合二 羅 囀 反丁口 羅 日羅 鈴 召得 結 騰 堅 堅 結 智印 任 今 身 以 鑁 野 囀

24・a 23・d

素 弥 羅二合 同上 ナシ 同上 ナシ 羅 縛 丁以 羅 〃 同上 得召 作 勝 堅 同上 縛 印智 〃 〃 同上 已 鑁二合 ナシ 囀二合

10 9 8

〃 〃 同上 輪 同上 誦 〃 〃 〃 〃 同上 羅 鉤 〃 〃 〃 同上 堅 結 同上 住 金 耳 以 〃 〃 同上

ℓ19 ℓ18 ℓ17 ℓ16 ℓ11 ℓ9 ℓ8 222下ℓ3 ℓ21 ℓ20 ℓ15 ℓ13 222中ℓ9 ℓ25 ℓ16 222上ℓ7 ℓ22

努羅羯都寐 阿 庾 都 哩 妮 囀 日羅 囀 日羅 日羅 日羅 悉 帑 摩 羅 日羅 曰 拍 火 歌 令 鬘 上 及 今

25・b

ナシ 薩 庾二合 覩 哩二合 妮二合 囀二合 日羅二合 囀二合 日羅 日羅二合 日羅二合 達 同上 麼 羅 同上 ナシ 同上 大 語 同上 慢 大 反 同上

12 11

〃 〃 〃 〃 〃 〃 同上 羅二合 同上 羅 羅二合 羅二合 同上 羅 〃 同上 羅 同上 指 〃 同上 合 〃 〃 同上 金

行		26•c	13
ℓ20	婆嚩蘇布使庾寐婆嚩	ナシ	〃
	薩		
ℓ21	也	二合也	同上
	摩	磨	〃
	哩	哩二合	〃
ℓ22	嚩	縛	〃
	蘖	孽	〃
ℓ23	日囉	日囉二合	曩二合
	哩	哩二合	同上
ℓ24	嚩	嚩二合	〃
223上 ℓ8	日囉	日囉二合	曩
ℓ11	日囉	日囉二合	曩二合
	那	那二合	同上
ℓ12	羅	囉	〃
ℓ14	日囉	日囉二合	曩二合
ℓ15	使	ナシ	同上
	耶	沙	耶
ℓ19	讒	纔	同上
ℓ20	婆	同上	波
ℓ26	日囉	〃	曩
	嚩	嚩二合	同上
	蘖	孽	同上
	囉	囉二合	〃
	賀	嗷	〃
	日	同上	ナシ
ℓ27	囉	〃	曩
	那	那二合	同上

行			
	日囉	日囉二合	曩二合
	誐	哦	同上
ℓ28	日囉	日囉二合	曩二合
	磨	摩	同上
223中 ℓ4	已	以	同上
ℓ8	今	ナシ	〃
	応	応常	〃
ℓ9	蘖	孽	〃
	日囉	同上	曩
ℓ10	日囉	〃	曩
ℓ11	縛	嚩	縛
ℓ14	引	ナシ	同上
ℓ15	二合	ナシ	〃
ℓ16	誐	哦	〃
	蘖	孽	〃
	他	ナシ	〃
	唌	梵	〃
ℓ17	誐	哦	〃
	日囉	同上	曩